

大学入学共通テストの「国語」記述式問題を巡る受験対策の「戦略ゲーム」化

陣内, 未来
九州大学教育学部

木村, 拓也
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/4372203>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 21, pp.49-62, 2021-03-15. Seminar of Educational Planning, Measurement, Evaluation, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

大学入学共通テストの「国語」記述式問題を巡る 受験対策の「戦略ゲーム」化

A “strategic game” used for preparing open-ended questions of the Japanese language in the Common Test for University Admissions

陣内 未来 木村 拓也

1. 問題の所在:大学入学共通テストにおける記述式の理念はどう分析され対策されるか

大学入学共通テストでは、当初、記述式や英語の民間試験導入などが構想されていた。しかし、それらの構想は実施が近づくにつれ世論からの批判が相次ぎ、結果として 2021（令和 3）年 1 月の第 1 回試験では実施を見送ることになった。記述式の導入については、採点精度の問題や高等学校における行事との関係から、2021（令和 3）年 1 月までに受験生の不安を払拭して安心して受験できる体制を整えることが不可能と判断され、2019（令和元）年 12 月 17 日に萩生田文部科学大臣の閣議後記者会見において延期が発表された（文部科学省，2019）。

「高大接続システム改革会議 最終報告」（高大接続システム改革会議，2016）では、そもそもセンター試験の課題として「複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考・判断の能力や、その過程や結果を表現する能力の評価」「文章を書くこと、図を描くことなどを解答に含む問題は出題しにくく、また、選択肢の内容を参考として解答するなどのケース」（高大接続システム改革会議，2016，p.52）が挙げられていた。そこで、大学入学共通テスト（当時は「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」）では「思考力・判断力・表現力」を中心とした評価を前提に、上記課題を克服する具体策としてマークシート式の改善に加えて、記述式の導入が検討されるようになる。つまり、記述式には受験生の「思考力・判断力・表現力」を評価することが期待されていると言える。

しかし、そのような期待の一方で大学入学共通テストの記述式問題を巡っては実施が近くなるにつれて、その在り方に対する批判が巻き起こった。批判の中心は試行調査を経た自己採点と公式採点との不一致率の高さに集中していたが、中には記述式で「思考力・判断力・表現力」を測定できるのか、という批判も見られた。例えば、「社説：新大学入試でプレテスト 思考力判断できる工夫を」（毎日新聞，2017 年 12 月 10 日，東京朝刊，5 頁）ではなんらかの根拠を示しているわけではないが、表現力の測定に疑問を呈している。「大学入試：記述式『廃止を』高校 7 割 共通テスト、採点に不安 1129 校回答」（毎日新聞，

2019年11月12日、東京朝刊、1頁)では毎日新聞社、大学通信、駿台予備校の独自調査において記述式問題への評価を高校に尋ねており、4校に3校が否定的な回答だとしている。その理由として「『自己採点が難しい』(76.2%)が最多で、『思考力・判断力・表現力を測れない』(39.1%)が続いた」としている。

このように、そもそも大学入学共通テストの記述式に期待されている「思考力・判断力・表現力」を測れているのかという指摘も今回の改革を巡る議論の焦点の一つとなっている。また、仮に試行調査段階で測れていると一定の評価を得ていたとしても、竹内(1991)が、教育産業が大学入試改革を徹底的に「戦略ゲーム」(竹内, 1991, p.181)化すると示したように、これまでの大学入試改革は結果的にそこに込められた教育的意義は蔑ろにされてきた失敗の歴史がある。

竹内(1991)は教育産業が「受験を単なる努力の積み重ねとみるよりも的確なストラテジーの行使」(竹内, 1991, p.171)と捉えている点を指摘している。そして、教育産業が「入試を徹底した戦略ゲームと考える」が故に、入試改革に込められた「教育的意義や人間形成などの教育的言説」(竹内, 1991, p.181)が蔑ろにされているという。この竹内(1991)の議論を踏まえると、「戦略ゲーム」化とは、「入試(改革)の教育的意義を無視した、教育産業によるストラテジーの行使」と定義することができる。

「戦略ゲーム」化されることで、実際にテストで想定されている能力を身に着けるよりも、別の角度から効率よく対策されてしまう可能性は十分にあり、実際これまでの入試改革はそうであったというのが竹内(1991)の指摘するところである。

それでは、大学入学共通テスト記述式において想定された「思考力・判断力・表現力」といった能力は、教育産業によっても同じ能力として受験生に伝えられるのであろうか。特に、「国語」の記述式に関しては同じく記述式が予定された「数学」と比較して、採点結果と自己採点の一致率が低いことが判明している(大学入試センター, 2019, p.34)。その為、問題の正当や解法が数学に比べ掴みにくく、戦略的に対策しづらい点が考えられる。果たして大学入学共通テスト記述式の「国語」に関しても教育産業によって「戦略ゲーム」化されるのだろうか。

2. 先行研究: 「国語」における「戦略ゲーム」化

鈴木(2011)は受験生を対象とした過去問の解説書による分析と、過去問の解説書が提供する問題の解法や身に着けるべき力、傾向と対策などの情報によって、現代文における「問いの発し方についてはあまり俎上に載せられないことがない」(鈴木, 2011, p.26)と指摘している。この点について、石川(2008)によれば共通第1次学力試験の開始とともに受験情報を発信する出版社や大手予備校が成長し、現代文の対策を変えたという。即ち、それまで現代文対策の中心であった日々の読書によって教養を身に着けたり、教科書を熟

読したりする態度は凋落を強いられ、書き手と読み手の間に位置する出題者の意図を理解することがカギとなったという（石川，2008，pp.201-203）。国語においては書き手と読み手の間に位置する出題者を理解し、それが教育産業による情報、過去問による傾向と対策によってもたらされたという指摘は竹内（1991）のいう「戦略ゲーム」化にも通ずるものがある。

さらに記述式について、その形式に込められた教育的意義や測定しようとする能力と、それに対する教育産業による「戦略ゲーム」化について、これまで議論されてきたのは特に小論文においてであった。島田（2012）は小論文について、高校における学習指導の場面では『小論文』を通して、文章力・表現力を強化するとともに、志望する領域への関心を深め、その領域に関連する知識を身に着けさせる」（島田，2012，p.72）としているが、それが入試対策になると「想定されるテーマや課題に対して一通りの解答を準備して、それを覚えてしまおうといった安易な対策も出てくるだろう」（島田，2012，p.72）としている。同じような指摘は石川（2010）でもなされており、参考書の普及により小論文は単なる時事問題を解説する科目に成り下がったと指摘する（石川，2010，pp.216-217）。また、中井（2006）も小論文のマニュアル的指導が進み、問題意識や深い思索といった「ナカミ」（中井，2006，p.6）のない小論文の存在を指摘している。

このように、自由度が高く、受験生の主体性や思考力を見るに適しているように思われる小論文でさえも教育産業による「戦略ゲーム」化が進められてきた。受験生の「思考力・判断力・表現力」を測ることが期待される国語の記述式が教育産業によってどのように捉えられ、対策されるのかを見ることは、一度は延期となった大学入学共通テストの記述式問題の在り方を考える上で意義のある取り組みである。特に、今後再導入される可能性もあり、記述式がどう捉えられたのかの検討を通して、その在り方について考え直す余地がある。

3. 本稿の課題:大学入学共通テスト「国語」記述式の「戦略ゲーム」化の検証

そこで本稿では、教育産業が如何に大学入学共通テスト「国語」の記述式を分析し、指導法を確立していくのかを見ていく。そしてその結果として、大学入学共通テスト改革で掲げられた能力像が「戦略ゲーム」化されるのか否かを検討したい。先述したような教育産業による「戦略ゲーム」化の如何を見ていく為に、以下ではまず大学入試センターによる「問題のねらい」や分析資料をまとめ、測定したい能力像や、各項目でどのような能力を問うているのかを整理していく。次に、国語及び国語教育の専門家による分析をすることで、専門家視点から今回の共通テスト「国語」における「思考力・判断力・表現力」がどう分析されているのかを見る。最後に、前二者と比較する形で教育産業による試行調査の分析と対策を見ていくことで、教育産業による改革の「戦略ゲーム化」が如何に行われ

ているのか、若しくは行われていないのかを検討していく。

4. 分析の枠組み

本章では大学入学共通テスト「国語」における記述式を巡る、大学入試センター、国語及び国語教育の専門家、教育産業という三者の言説を見ていく。その際、主な資料として、大学入試センターが公開する大学入学共通テストを巡る「問題のねらい」や報告書、国語教育の専門家による分析資料、教育産業による分析資料及び参考書等⁽¹⁾を用いる。尚、教育産業による分析資料とは「平成 29 年度試行調査」（同年 11 月実施）、「平成 30 年度試行調査」（同年 11 月実施）の直後に各社によって発表されたものに限定している。具体的には以下の（表 1）（表 2）に示したものをを用いた。また、教育産業による参考書に関してもこの試行調査に基づいた対策の確立を見る為、期間を限定し（表 3）のものをを用いた。先述したように、2019（令和元）年 12 月 17 日に萩生田文部科学大臣が大学入学共通テストにおける記述式問題の導入延期を発表しており（文部科学省，2019）、この記者会見の前後で受験対策が大きく変化したことは想像に難くない。その為、大学入学共通テストの記述式における、教育産業の分析から対策への過程を検討するためには試行調査が行われた時点から大臣会見による記述式延期発表までの期間に資料を限定することが望ましいとした。

これら資料を基に、以下では大学入試センターによる資料の検討、国語及び国語教育の専門家による分析資料の検討、教育産業による分析資料の検討という順で進めていく。

表 1 「平成 29 年度試行調査」の各社分析資料

「平成 29 年度試行調査」の各社分析資料			
会社名	分析主体	作成年月日	資料名・URL
代々木ゼミナール	教育センター 国語研究室	2017/1 2/5	【国語】大学入学共通テスト試行調査（プレテスト）所見 https://www.yozemi.ac.jp/kosha_ryo/files/20171204_pretest_kokugo.pdf
代々木ゼミナール		2017/1 2/5	2017 年度実施「大学入学共通テスト」試行調査（プレテスト）分析（国語・英語） https://www.yozemi.ac.jp/nyushikaikaku/bunseki_1712_01/

河合塾	河合塾現代文科	2018	河合塾 高大接続改革シンポジウム 科目別レポート現代文 https://www.kawai-juku.ac.jp/highschool/admission-sympo/pdf/japanese01-2018.pdf
第一学習社	永尾和子	2019/1/9	大学入学共通テスト試行調査分析（平成二九年度） http://www.daiichi-g.co.jp/kyoka/pretest/20190111_kokugo_h29.pdf
第一学習社	永尾和子	2019/1/9	大学入学共通テスト 29 年度試行調査と 30 年度試行調査の比較分析 http://www.daiichi-g.co.jp/kyoka/pretest/20190110_kokugo_h29-h30_hikaku.pdf

表 2 「平成 30 年度試行調査」の各社分析資料

「平成 30 年度試行調査」の各社分析資料			
会社名	分析主体	作成年月日	資料名・URL
代々木ゼミナール		2018/1/28	2018 年度実施「大学入学共通テスト」試行調査（プレテスト）分析 https://www.yozemi.ac.jp/nyushikaikaku/bunseki_1811_02/
河合塾	河合塾現代文科	2018	平成 30 年度試行調査（プレテスト）設問別分析「国語」 https://www.kawai-juku.ac.jp/highschool/admission-sympo/pdf/admission-test-2018-05.pdf
第一学習社	永尾和子	2019/1/9	大学入学共通テスト 29 年度試行調査と 30 年度試行調査の比較分析 http://www.daiichi-g.co.jp/kyoka/pretest/20190110_kokugo_h29-h30_hikaku.pdf
第一学習社	永尾和子	2019/1/15	大学入学共通テスト試行調査分析（平成三〇年度） http://www.daiichi-g.co.jp/kyoka/pretest/20190115_kokugo_h30.pdf

駿台予備校	清水正史		現代文 https://www2.sundai.ac.jp/yobi/sv/sundai/scontents_P/news_PD/1337481350805.html
-------	------	--	--

※情報が明確に公開されていない箇所は空白とした。

表 3 分析対象とする各社参考書

分析対象とする各社参考書			
著者	発行年月日	タイトル	出版社
霜栄・清水正史	2019/2/21	大学入学共通テスト 国語 記述対策問題集 —〈実用国語〉へのアプローチ— 〈改訂版〉	駿台文庫
霜栄・多田圭太郎 清水正史・岩科琢也	2019/3/25	大学入学共通テスト 現代文 記述式&マーク式対策問題集 —論理国語・実用国語・文学国語—	駿台文庫
浦貴邑・中崎学	2019/4/8	大学入学共通テスト 国語[現代文]記述問題の解き方が面白いほどわかる本	KADOKAWA
清水正史 多田圭太郎	2019/7/20	大学入学共通テスト 現代文（記述式・マーク式） 実践対策問題集	旺文社
Z会編集部	2019/7/10	ハイスコア！共通テスト攻略 国語 現代文	Z会

5. 共通テスト試行調査における「問題のねらい」

教育産業が試行調査を如何に分析したのかを検討するにあたり、まずは大学入試センターが試行調査をどのように捉えていたのかを整理する。試行調査は 2017（平成 29）年と 2018（平成 30）年の 2 回行われている。『平成 29 年 11 月に実施する大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の趣旨について』では「問題のねらい」として、「高校教育を通じて、大学教育の基礎力となる知識及び技能や思考力、判断力、表現力がどの程度身に付いたかを問うこと」（大学入試センター，2017a, p.4）を掲げている。そして記述式の導入に加え、マーク式では「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現

力を発揮して解くことが求められる問題を重視した出題の工夫・改善」(大学入試センター, 2017a, p.4) がなされたとしている。

これを「平成 29 年度試行調査」の具体的な記述で見ると、「言語を手がかりとしながら、与えられた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面などに応じた文章を書いたりすること」(大学入試センター, 2017a, p.5) や題材の組み合わせを行う出題を特徴としていた。

実施された調査では第 1 問が全問記述式となり、実用的な文章を含む複数の資料を用いて「テキストを場面の中での的確に読み取る力、及び設問中の条件として示された目的などに応じて思考したことを表現する力」(大学入試センター, 2017b) が問われた。第 2 問はマーク式であり、論理的な文章を基に図や文章の関連付け、文章構成や展開、テキストを読み取り、「テキストの内容と結び付く情報とそれらの適切な論理の展開を判断する力」(大学入試センター, 2017b, p.2) が問われた。

続く「平成 30 年度試行調査」は「平成 29 年度試行調査」での検証項目に加えて実施運営面なども含めた総合的な検証のために行われた (大学入試センター, 2018a)。『『大学入学共通テスト』における問題作成の方向性等と本年 11 月に実施する試行調査 (プレテスト) の趣旨について』の内、(2) では「高校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力を問う問題作成」(大学入試センター, 2018b, p2) と記されており、「平成 29 年度試行調査」の問題のねらいと同じであることがわかる。

「平成 29 年度試行調査」と同じく第 1 問は全問記述式であるが、内容は生徒会規約などを用いた実用的な文章から、言語に関する論理的な文章へと変化している。ただ、問題のねらいは「二つの文章を関連付けながら、構成や展開をとらえるなど、テキストを的確に読み取る力、及び設問中の条件として示された目的等に応じて思考したことを表現する力を問う」(大学入試センター, 2018c, p1) とされており問いたい力の変化はほとんどないと言える。第 2 問においては実用的な文章や法的文章、論理的な文章を組み合わせる問題であり、問題のねらいでは「テキストの内容を的確に読み取る力を問うとともに、それらを互いに関連付けながら、設問中に示された条件に応じて考えを深め、適切に判断する力を問う」(大学入試センター, 2018c, p2) とされ、論理展開を判断するとされていた「平成 29 年度試行調査」からの変更点がみられた。

「問題のねらい」から見えてくるのは、複数資料における情報を自ら再構築し、全体を理解したうえで、設問の要求に合わせて思考し表現する能力である。

6. 国語及び国語教育の専門家による分析

大学入試センターが公開している資料の中に、「平成 29 年度試行調査」への「有識者か

らいただいたコメント」があり、2017（平成 29）年度に関しては「国語」に対して国文学研究資料館長のロバート・キャンベル氏（専門：日本文学）からコメントが寄せられている。キャンベル氏は試行調査について、「設問の素材に図表や写真が含まれ、文章とともに、それらが的確に理解されているかどうか、あるいは文語表現が『単語』としてだけではなく、文脈の中で十分に読み取れているかどうかなど、記述式や複数選択の解答が導入され、主体的な学びを測る効果に重点が置かれている。これらの点は、高く評価したい。」（大学入試センター，2017c, p.1）とコメントしている。ただ、主体的な学びを測ることは繰り返し述べられているが、肝心の「思考力・判断力・表現力」の測定如何については触れられていない。

同じように試行調査に対して肯定的な評価を下しているのが、過去に「国語」の問題作成委員も務め、早稲田大学教授である幸田国広氏（専門：国語教育）だ。幸田氏は「平成 29 年度試行調査」について、従来型の試験と比較する形で「コンテクスト（場面、状況）とともに文章を読み、読み取った情報をもとに必要な思考・判断を表現する」（幸田，2019, p.7）と評しており、その代表的な問題が「平成 29 年度試行調査」の第 1 問問 3 であると紹介している。

一方で、「平成 30 年度試行調査」では記述式の問い方がシンプルになっているが故に「複数の文章や情報を関連付けて読み取ったことを記述するに止まり、その先の思考力まで問い切れていない」（幸田，2019, p.9）と批判的な指摘もしている。

幸田氏の「平成 30 年度試行調査」への指摘に類似した指摘をしているのが日本大学文理学部教授の紅野謙介氏（専門：近代日本文学）であり、紅野氏は「平成 29 年度試行調査」の記述式問題について「問われているのは、複数の資料をまたいで、あちらこちらにちらばっている情報をひとまず集約する能力ではあるが、「創造的」な能力ではなかった」（紅野，2018, p.184）と評している。

これらから、「思考力・判断力・表現力」の測定については専門家のなかで一致した見解はなく、文章の素材について言及して論じるものもあれば、キャンベル氏のように問題形式に言及する者もあり、「思考力・判断力・表現力」がどの要素に一番影響されるのかなどの一致した見解が得られていないのが現状である。各専門家が思い思いに自らの焦点で記述式の測定の出来不出来が語られてしまっている様子が伺える。

7. 教育産業による分析

7.1. 「平成 29 年度試行調査」の各社分析

2017（平成 29）年度の試行調査の国語・現代文では各社、「思考力・判断力・表現力」が測定できているのか否かに焦点を当てた分析がみられた。

第一学習社では「記述式問題のねらいが、マーク式では問えない深い思考力・判断力を

問うことであれば、この問題（註:第1問）はその狙いを実現するものとは言えないのではないか。」（永尾，2017a）と評しており、のちに「平成30年度試行調査」との比較では明確に「読解において思考力・判断力を求められることはない」（永尾，2019b）としている。そして思考力・判断力に変えて求められる力は第一学習社に表現される「情報の整理活用能力」（永尾，2019）や代々木ゼミナールによる「与えられた資料にもとづいて、必要な部分を抜き出し、的確にまとめれば解答が得られる」（教材研究センター国語研究室，2017）といった表現に言われるように、「情報処理能力」であるとされる。

記述式の評価がマイナス面に偏る一方で、マークシート式の第2問に関しては問5に本文中に記述のないテーマを本文の議論から発展・推測させて解く問題があり、その点を思考力型の問題として評価する社もあった（代々木ゼミナール教材研究室 2017）。このことはマークシート式において思考力型と評価された問題例として記しておきたい。

7.2. 「平成30年度試行調査」の各社分析

「平成30年度試行調査」の国語・現代文では第1問が評論・記述式問題、第2問が評論・マークシート式であった。

まず、第1問についてであるが、各社から出される評価としてはやはり「思考力・判断力・表現力」を測定できているのかに関する疑問であった。代々木ゼミナールでは「的確な要約力、一般化能力があれば対処できる」（代々木ゼミナール，2018）としている。第一学習社でも、第1問の問2の解説にあたり、「情報を抜き出して並べるだけで、深い思考力が必要ないのであれば、マーク式の方がまだ考える時間がとれる」（永尾，2019c, p.2）とまで述べている。駿台予備校は記述式について分析で「深い思考力を問うより、短い時間でいかに情報を処理し記述できるかを試すものになりかねない危惧もある」（清水，駿台予備校 HP の記述より）とし、記述式を用いることで「思考力・判断力・表現力」を測れているのかは微妙なところだろう。

一方で、マークシート式の第2問に関しては「思考力・判断力・表現力」の測定に関して評判が良い。駿台予備校では第2問について「本文の論旨の把握を前提とする推論や抽象化・具体化といった応用的思考力を問う設問が主である」（清水，駿台予備校 HP より）と評しており、第一学習社でも第2問の問4について「思考力・判断力を深める問いとして工夫が見られる」（永尾，2019c, p.5）と記述式の第1問よりもプラスの表現がみられた。

「思考力・判断力・表現力」を測る問題として導入された記述式に対する評価が芳しくない一方で、マークシート式に一定の評価が与えられている点は興味深いと言える。

また第1問、第2問双方とも複数資料を扱った大問となっており、その点についての記述はやはり多い。例として、河合塾では第1問の問2、問3を「二次・私大入試でもほとんど見かけない問題である」（河合塾，2018）と評している。

以上の指摘が各社の分析資料から見られる試行調査の特徴である。総じて述べているこ

とは、「思考力・判断力・表現力」を測るのに記述式でなければならないのか、という疑問である。しかし、そのような疑問の一方で、現状の資料で対策を構築しなければならないのが教育産業である。そして対策において、各社が受験生に身に着けさせようとする力はどうのようなものなのか。また、その力をどのように身に着けさせるのか、以下で考察していく。

7.3. 各社の対策

現在出されている各社の対策は試行調査の分析をもとに建てられている。その為、ここでは上記で見てきた各社の分析で見出した能力が対策の文脈でどのように変化するのかを見ていきたい。

各社の対策を見ていく中で、共通して伸ばすよう指摘している能力が様々な情報を効率的に拾い、統合する力である。複数資料を総合的に考察するというのは、今回の大学入学共通テストの大きな特徴の一つでもある。また、試行調査においても記述式問題を解くにあたり、複数資料に含まれる情報の収集と統合は求められるステップであった。その為、各社その点を強調するのは理解できる。しかし、興味深いのは大学入試センター側と教育産業側で想定している情報の収集と統合に要する能力に差異がある点である。例えば、『大学入学共通テスト 国語[現代文]記述問題の解き方が面白いほどわかる本』（浦・中崎，2019）では『共通テスト』の解法のポイントを一言で言えば、〈検索〉する、ということです」（浦・中崎，2019，p.15）と述べられており、「たくさんの文章や資料は、解答を作る際に、いわば「データベース」として使用すればいい」（浦・中崎，2019，p.15）とされている。大学入試センターの「問題のねらい」では資料を読み、自分で解釈・統合した後に、設問の要求に合わせて思考するのであった。しかし、浦・中崎（2019）では設問に合わせて資料を確認し、要素を“選び出す”のである。

これは他の参考書でも当てはまる。霜・多田・清水・岩科（2019）においても推論や新たな考えの形成を求める問題以外では、「テキスト内の特定の部分から目的に応じて情報を取り出す力」（霜・多田・清水・岩科，2019，p.8）や「〈本文に書かれてあること〉で解答」（霜・多田・清水・岩科，2019，p.9）することを求めている。清水・多田（2019）では「マーク式の第2問・第3問に比べ、記述式の第1問は、文章を深く読み込むというよりは、設問要求に従って文章・資料から必要な情報を探して取り出し、設問条件に合わせて統合・解釈し表現する」（清水・多田，2019，p.136）と述べている。

こうした教育産業の対策から見えてくるのは、問題を解くにあたりテキストの読みは設問に従属する点である。これは大学入試センターが想定しているような「テキストに書かれていること（構造や内容）を把握した上で、テキスト全体から精査・解釈し、それに基づき考えを形成する」（大学入試センター，2017d）ような力とは大きく異なる。即ち、大学入試センターがテキストの解釈から入り、設問の要求に合わせて思考するのに対して、

教育産業は設問から入り本文を解釈していくのである。これは問題に回答するために練られた戦略的な読みと言える。

8. 結論：教育産業による大学入学共通テストの「戦略ゲーム」化

本稿では、大学入学共通テスト「国語」における記述式問題に対して、教育産業が如何にして「戦略ゲーム」化していくのかを検討してきた。今一度、本稿における「戦略ゲーム」化の定義を確認しておきたい。「戦略ゲーム」化とは、「入試（改革）の教育的意義を無視した、教育産業によるストラテジーの行使」であった。「戦略ゲーム」化が成立するためには「教育的意義の無視」と「ストラテジーの行使」が必要である。教育産業の対策がこの2点を含んでいるのかを以下では検討していきたい。

今回の共通テスト改革においては「思考力・判断力・表現力」の測定を狙いとする大学入試センターの作題方針に対して、国語及び国語教育の専門家からは紅野謙介氏のように「思考力・判断力・表現力」の測定ができていないとする立場もあれば、設問次第とする幸田国広氏のような立場もみられた。このように、専門家では各々の焦点で「思考力・判断力・表現力」を論じる為、果たしてそれら能力を測定できているのか否かに一定の合意が得られていない。その意味で、そもそも「無視」しているのか、という見解は成り立ちにくいのもかもしれない。

一方で教育産業による記述式への分析を見ていくと「平成 29 年度調査」でも「平成 30 年度調査」でも記述式に関しては「思考力・判断力・表現力」の測定ができていないと目立つ。ここで、専門家レベルでは定まっていなかった「思考力・判断力・表現力」の評価に対して、試行調査直後の報告書の時点では教育産業界において「思考力・判断力・表現力」は測定できていないという、ある程度一致した見解が得られている。求められている能力は「思考力・判断力・表現力」ではなく、如何に情報を素早く整理し、まとめるかという「情報処理能力」が求められるといった表現が中心であった。ただ、このような記述式に対する分析は決して新しいものではない。例えば石原（2007）は国立大学の二次試験で見られるような記述問題（傍線部の説明問題）を「前後の文脈の『情報処理能力』というか、文脈要約能力を試しているにすぎない」（石原，2007，p.222）と述べており、程度の差はあれここで各予備校が述べている「情報処理能力」と基本的には同じことを述べている。

言うなれば、「無視」しているというよりも、国語記述式の対策を「情報処理能力」の問題として展開した、という表現の方がより適切かもしれない。このように「情報処理能力」の問題として展開することが「無視」に当たるかどうかは議論が必要であるが、そもそも教育的意義からは大きく離れる結果となったことは否めない。

次に、教育産業のストラテジーの行使についてであるが、先述の通り、各予備校が如何

に対策を練ったのかを参考書の解説を基に検討した。その結果、設問に合わせて情報を選びだし統合するという、「設問に従属した読み」が見られた。これは大学入試センターが想定する、テキストの精査・解釈から入り設問の要求に合わせて考えを構築していく方向とは異なる。この点において、教育産業による対策は非常に戦略的な対策、即ちストラテジーの行使だと見なせる。つまり、大学入試センターが想定した「思考力・判断力・表現力」の具体的な形が設問の要求に合わせた思考であるならば、その思考法から外れた教育産業による独自の対策指導はまさに「戦略ゲーム」である、とみてもよいのかもしれない。

最後に今後の課題を述べたい。上記で示した教育産業による「戦略ゲーム」化の一方で、各参考書では『大学入学共通テスト』は、思考力・判断力・表現力を重視する新時代の大学入試の象徴となるテスト」（清水・多田，2019，p.2）と位置付けていたり、「教科書を中心とする基礎的な学習に基づく思考力・判断力・表現力を判定する試験」（Z会編集部，2019，p.3）と記したりしている。先述したように、大学入試センターが公表する「思考力・判断力・表現力」とそれに基づく解法とは異なる形式で教育産業は対策を指導している。しかし、教育産業によるこれら「思考力・判断力・表現力」への言及を踏まえると、対策の背後には教育産業が想定する独自の「思考力・判断力・表現力」を窺うことが出来る。本稿では抽象的な「思考力・判断力・表現力」を具体的な形に落とし込んだ解法の視点から両者を見てきた。今後はより抽象的かつ根本的な、大学入試センターと教育産業との間にある「思考力・判断力・表現力」の差について検討していく必要があるだろう。

〈注〉

(1) 本論文で引用した学習教材の関係者と本論文の著者との間には、開示すべき関係性は一切ない。また、引用している学習教材は本論文の著者が独自に購入したものである。

〈引用文献〉

大学入試センター，2017a，『平成29年11月に実施する大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の趣旨について』

大学入試センター，2017b，『【国語】問題のねらい、主に問いたい資質・能力及び小問正答率等』

大学入試センター，2017c，「有識者からいただいたコメント」

大学入試センター，2017d，「【国語】作問のねらいとする主な「思考力・判断力・表現力」，及びそれらと出題形式との関係についてのイメージ（素案）」

大学入試センター，2018a，「大学入学共通テストの導入に向けた試行調査（プレテスト）について」

大学入試センター，2018b，「「大学入学共通テスト」における問題作成の方向性等と本年11月に実施する試行調査（プレテスト）の趣旨について」

- 大学入試センター，2018c，「【国語】問題のねらい、主に問いたい資質・能力、小問の概要及び設問ごとの正答率等」
- 大学入試センター，2019，「大学入学共通テストの導入に向けた試行調査（プレテスト）（平成30年度（2018年度）実施）の結果報告」
- 石原千秋，2007，『秘伝 大学受験の国語力』，新潮選書
- 石川巧，2008，『「国語」入試の近現代史』，講談社選書メチエ
- 石川巧，2010，『「いい文章」ってなんだ？—入試作文・小論文の歴史』，ちくま新書
- 河合塾現代文科，2018，「河合塾 高大接続秋角シンポジウム 科目別レポート現代文」，<https://www.kawai-juku.ac.jp/highschool/admission-sympo/pdf/japanese01-2018.pdf>，（最終閲覧日：2020/11/20）
- 河合塾現代文科，2018，「平成30年度試行調査（プレテスト）設問別分析「国語」」，<https://www.kawai-juku.ac.jp/highschool/admission-sympo/pdf/admission-test-2018-05.pdf>，（最終閲覧日：2020/11/20）
- 高大接続システム改革会議，2016，「高大接続システム改革会議 最終報告」
- 幸田国広（編著），2019，『新時代の大学入試 国語記述式問題への対応 10の問題例とその解説』，教育出版
- 紅野謙介，2018，『国語教育の危機—大学入学共通テストと新学習指導要領』，ちくま新書
- 文部科学省，2019，「令和元年12月17日（火）萩生田文部科学大臣の閣議後記者会見における冒頭発言」，https://www.mext.go.jp/content/20191217-mxt_kouhou01-000003280_2.pdf，（最終閲覧日：2020/11/20）
- 永尾和子，2019a，「大学入学共通テスト試行調査分析（平成二九年度）」，http://www.daiichi-g.co.jp/kyoka/pretest/20190111_kokugo_h29.pdf，（最終閲覧日：2020/11/20）
- 永尾和子，2019b，「大学入学共通テスト 29年度試行調査と30年度試行調査の比較分析」，http://www.daiichi-g.co.jp/kyoka/pretest/20190110_kokugo_h29-h30_hikaku.pdf，（最終閲覧日：2020/11/20）
- 永尾和子，2019c，「大学入学共通テスト試行調査分析（平成三〇年度）」，http://www.daiichi-g.co.jp/kyoka/pretest/20190110_kokugo_h29-h30_hikaku.pdf（最終閲覧日：2020/11/20）
- 島田康行，2012，『「書ける」大学生に育てる—AO入試現場からの提言』，大修館書店
- 清水正史，「現代文」駿台予備校ホームページより，https://www2.sundai.ac.jp/yobi/sv/sundai/scontents_P/news_PD/1337481350805.html，（最終閲覧日：2020/11/20）
- 清水正史・多田圭太郎，2019，『大学入学共通テスト 現代文（記述式・マーク式）実践対策問題集』，旺文社
- 霜栄・清水正史，2019，『大学入学共通テスト 国語 記述対策問題集—〈実用国語〉へのア

- プローチー〈改訂版〉』, 駿台文庫
- 霜栄・多田圭太郎・清水正史・岩科琢, 2019, 『大学入学共通テスト 現代文 記述式&マーク式対策問題集—論理国語・実用国語・文学国語—』, 駿台文庫
- 鈴木義里, 2011, 『大学入試の「国語」 あの問題はなんだったのか』, 三元社
- 竹内洋, 1991, 『立志・苦学・出世—受験生の社会史』, 講談社現代新書
- 浦貴邑・中崎学, 2019, 『大学入学共通テスト 国語[現代文]記述問題の解き方が面白いほどわかる本』, KADOKAWA
- 代々木ゼミナール, 2017, 「2017年度実施「大学入学共通テスト」試行調査(プレテスト)分析(国語・英語)」 https://www.yozemi.ac.jp/nyushikaikaku/bunseki_1712_01/ (最終閲覧日: 2020/11/14)
- 代々木ゼミナール, 2018, 「2018年度実施「大学入学共通テスト」試行調査(プレテスト)分析」
- 代々木ゼミナール 教育センター国語研究室, 2017, 「【国語】大学入学共通テスト試行調査(プレテスト)所見」, https://www.yozemi.ac.jp/kosha_ryo/files/20171204_pretest_kokugo.pdf (最終閲覧日: 2020/11/20)
- Z会編集部, 2019, 『ハイスコア! 共通テスト攻略 国語 現代文』, Z会